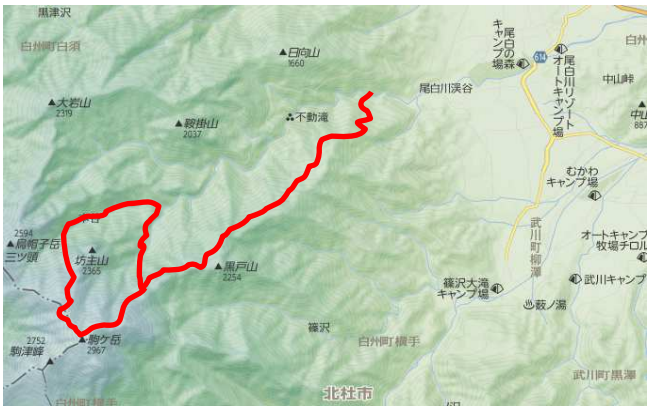
山 行 報 告 書

作成：平成 26 年1月5日
愛知岳連　岡崎山岳会

山名[山域]	甲斐駒ケ岳・尾白川下流域	目的[方法]	マルチピッチアイスクライミングの実践
期間	H25.12.29～H26.1.1	形態	テント泊
参加人数	３人		

行動記録：
H25.12.29　竹宇駒ケ岳神社(0920) -- 06:00—五合目小屋跡(1520) --01:40--岩小屋付近（1700）
H25.12.30　岩小屋付近（0540）—1：40—出合（07：20）—06：30—滑滝取付（1350,14:30）—2：00—F1（16:30）
H25.12.31 F2取付（0730）—9：30—（17:00）登はん終了
H26.1.1 ビバーグ地点(6：30)—02:00—坊主中尾根（08:30）—3：30—北山稜を経て甲斐駒頂上（12:00）
—3：00—五合目小屋跡（15：00）—4:00—竹宇駒ケ岳神社(17:00)

概念図：



日誌：
29 日　天気が良く途中富士山を展望出来るほどであった。しかし、僕のペースが思うように上がらない。どうやら娘にロタウィルスをうつされていたらしい。水を飲むことはできるが食べる事が全くできず、今まで経験したことがないほど苦しい登りとなった。結局、共同装備のロープを持ってもらうはめになるほどに完全に精彩を欠き、なんとか五合目小屋跡にたどり着き黄蓮谷方向へ下るも、予定であった滑滝の出合までは程遠く、岩小屋付近でビバーグすることになった。
30 日　下痢に悩まされるも復活。昨日分を挽回するためまだ暗いうちから出発。7時過ぎには本谷との出会に到着。ここでテントを張っていた他のパーティーと合流する形となり本谷を上がる。しかし、思った以上に雪が多くペースが上がらない。滑滝の取付まではガイドブックによると1時間半なのだが、５人でラッセルを交代して進むにも関わらず6時間半もかかり 14 時頃に到着する。別のパーティーはここでビバーグするようであったが、僕らはリーダー判断で3ピッチ程のF1だけ登ることになった。ここまでのラッセルでかなり消耗して足にきていたので、「明日でもいいじゃん」って思いながら登っていたが、ここで頑張って登ったのが翌日大きく功を奏すこととなる。
31 日　日の出とともに F2 に取りつく。天気は良く、氷の状態もよく快適なスタート。何か所か傾斜がキツい所があるものの順調に登る。しかし、いつになっても終わりが見えない。正午を過ぎたぐらいからもう嫌になってくる。そして、もう今年中に帰られないことを確信する。下からは昨日のパーティーの声が聞こえるが、なかなかペースが上がらないようだ。「いつになったら終わるんだ」と思いながら登っているうちにだんだん日が陰ってくる。全部で8～10 ピッチ、最後は時間との戦いの中なんとか明るいうちに登りきり、ビバーグできる場所を探してテントを張り始めた時には辺りは暗くなっていた。２泊の予定だったためこの日の食糧は少なく、それを3人で分けて食べながら下の「パーティーはどうなったのだろう？」と思っていると、「ビレイ解除—」という声が下から聞こえてくる。まだ、登り続けているようだ…。確かに途中でビバーグできそうな場所はなかったので登るしかないのだが、暗闇の中　200m以上ある氷壁の上部にいると思うとホントに気の毒に思えた。結局、このパーティーは紅白歌合戦の前半が終了した頃ビバーグポイントに到着した。
１日　この日もラッセル。天気は吹雪。道なき道を3人で甲斐駒を目指し進む。正午までにピークにたどり着ければ今日中に下れる可能性が出てくる。北稜の一般登山道に出ると風がとても強く、そして辺りは何も見えなかった。ひたすら耐えながらついに甲斐駒ケ岳到着。「たどり着いた～」ではなく、「たどり着けた～」と思ったのは初めてだった。それから登山道の有難味を噛みしめながら下山。五合目小屋跡についたのは 15 時で、ここで今日中に帰れることを確信する。そして最後はヘッドライトを付け、３人ヘトヘトになりながら登山口に到着した。

感想：　痛感したのは軽量化の大切さ。今まで本気で軽量化について考えていなかったと反省。あとは登はんにかかる時間を短縮するためにシステムをよく考える事。「その場で…」ではなく、例会等で事前に登はんシステムについてもしっかり話し合っておくべきだと思った。また、トップを誰でもできるくらい個々のスキルを底上げすることも必要と感じた。
　四日間フルに日の出から日没まで活動し、僕が経験した中では最もハードな山行でしたが、僕が経験した中では最も感慨深く思い出に残る山行となりました。